

Hokkaido University Institute for the Advancement of Higher Education

# ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構 Newsletter No. 103

- 総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革に係る  
研究成果発表ワークショップ開催される (8ページ)
- 特別講義「キャリアデザイン」開講 (15ページ)
- 2015サイエンスパーク実践報告  
「ごはんはカラダを通してどこへいく？—アニメで体験  
しよう」 (17ページ)
- (詳しい目次は裏表紙にあります)

## 巻頭言 FOREWORD

### オープンエデュケーションセンター

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター センター長 小林 幸徳

オープンエデュケーションセンター (OEC) は、情報通信技術 (ICT) を活用した教育及び学習支援を行うとともに、オープン化した教育資源に関する研究開発を行うことを目的として、平成26年4月に高等教育推進機構に設置されました。本学においては、これまで教務情報システムによる教育基本データの管理、教育情報システムを活用した教育・学習支援、CALLシステムやCoSTEP、工学系教育研究センターCEEDによるeラーニングの実施、オープンコースウェア (OCW) 事業や附属図書館HUSCAP事業の展開など、広くオープンエデュケーションに関わる取り組みを推進してきました。しかしながら、担当部局間の連携・協力が必ずしも十分

に図られていない、ICTを利活用した大学教育を改善する手法と履修データ分析体制が未確立、教育の質向上に寄与するオープン教材の開発体制が未確立等の問題点・課題が指摘されてきました。そこで、全学的な統制の下、これまでのOCWやeラーニングの資産を引き継ぎつつも、OER (Open Educational Resource) を体系的に整備し、学生の主体的な学習の促進と授業改善に有機的に結びつけるとともに、教育コンテンツを学外にも発信すべくオープンエデュケーション

センターが設立されました。

OECの前身はOCWです。OCWでは、北海道大学の知的資源を広く一般に提供することを目的としてきました。OECはこの活動に加えて、学内の教育改善に資する教材の開発支援と新たな教育手法の導入推進に取り組んでいます。さらに、平成27年度からは、CoSTEPを部門として統合し、eラーニング部門との2部門体制に再編するとともに、CEEDのeラーニングシステム開発部とも連携を強化する体制となりました。また、今年度から稼働している新たな教育情報システム(新ELMS)を用いた教育学習支援機能の利用促進に関する業務も担当する予定です。このように、OECはeラーニング教材の制作を支援するだけでなく、北海道大学における教育改革の推進を多面的に支援する役割を担っています。

ところで、オープンエデュケーションという言葉からはどのような教育や活動をイメージされるでしょうか？

近年、大規模公開オンライン講座:MOOC(Massive Open Online Course)が注目を集めていますので、インターネット上で教材や教育環境をオープンにする活動と捕らえる方が多いのではないのでしょうか？もちろん、そのような活動にも取り組んでおり、OCWで公開してきた「環境放射能人材育成コース」を英語化し、2015年7月14日よりMOOCコンソーシアムである「edX (<http://www.edx.org>)」において

「Effects of Radiation: An Introduction to Radiation and Radioactivity」

として広く世界中に公開を開始しました。是非一度ご覧ください。

他方でOECが現在最も力を入れて取り組んでいるのは、OERを体系的に整備し、学生の主体的な学習の促進と授業改善に有機的に結びつける活動です。このため、昨年度からは学内の正規科目で用いることを目的とするコンテンツの収録と制作を中心に活動をしています。これには、OERを用いる遠隔教育やeラーニングのように、インターネットを介して講師が教育を行うものも含まれます。そこで、OECではコンテンツ配信サーバーを独自に構築し、運用を開始しました。昨年度、試験的に構築したサーバーでは、世界展開力事業であるPAREプログラム

科目を配信し、北大の学生に加えてタイとインドネシアのそれぞれ3大学の学生たちが実際に学びました。また、今年度より開校した新渡戸スクール科目の一部でも、OERの活用に取り組んでいます。

OERの制作と活用というと少し敷居を高く感じる方もいるかもしれません。そこで、私自身の経験をご紹介します。私は工学院の講義を担当していますので、数年前にCEEDで大学院の講義を収録しました。このために、講義資料をパワーポイントで作成するとともに、講義の要点をまとめた配布資料を用意しました。なお、数式の導出などの一部にはホワイトボードを用いましたが、この部分も動画として収録されています。講義をする際には、収録を意識しすぎないで普通に動きながら行いましたが、スタッフの方が適切に編集していただきますので、完成した教材は見やすいものになっています。

昨年度は、もう一つ異なるタイプの教材を制作しました。これは、学部で担当している授業でいつも感じていた課題を解決するためのものです。この授業では、講義と実験が同じ学期に開講され、実験は少人数のグループで順に行うため、学期の初めのグループは、講義がまったく進んでいない状態で実験を実施し、学期末になると該当箇所の講義が終わってしばらくしてから実験をするグループがあることが課題でした。そこで、実験の様子を実験室で収録し、パワーポイントで作った教材に書き込みながら音声を収録できるThinkBoardというソフトを用いて対応する理論説明用の教材を制作しました。特に原稿などを用意せずに、いつものように説明して収録しましたので、合計40分程度の教材の収録を、数時間のテスト収録と本番収録で行えました。収録後は、OECのスタッフが実験と理論の動画を効果的に織り交ぜて編集を行い、期待以上の教材が完成しました。初めて作る教材には、改善しなければならない点が多いですが、あまり難しく考えないで、まずは作ってみて、直すべきところがあったら、後からその部分を収録し直して編集することも可能です。少しずつ良いOERを目指せるのです。

OERのさらに進んだ活用としては、反転授業、アクティブラーニング、ブレンド型授業などがあります。これらでは、学生に授業の前にOERによる学習を課し、その中で理解度を確認するクイズに答

えさせ、そして教室ではその学習を前提に質問や討論を多用します。教員は、各学生のクイズへの解答状況を含む学習履歴を授業の前に確認することによって、個々の学生の準備状況や理解度を把握した上で講義に臨むことが可能となります。

近年は、研究大学においてもこれまで以上に教育の質保証や質の向上が強く求められています。教育を通じた研究力の向上を目指すとき、限られた時間を有効に活用するためにも、最新のICTを活用した

OERの制作と新たな講義スタイルへの取り組みによって、教員と学生が一体となった学びと研究への取り組みが望まれます。

この記事をお読みいただき、ご自身の講義に用いる教材を魅力あるものに刷新したい、また、eラーニングに関心があるなどありましたら、是非ともOECへお問い合わせください。専任スタッフが、皆様の教材制作を多面的に支援いたします。

## 教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

### TA研修会開催される —181名が修了—

2015年度のTA研修会が、4月2日（木）に機構の大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当するTAに対しては、当該授業料目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前に当該業務に関する適切なオリエンテーションが義務づけられています。本センターでは、平成10年度からTA研修会を実施してきており、今回で18回目となります。今年度の全学教育におけるTA採用人数は、のべ1,327名（対前年度比4.0%増）です。のべ時間では2.7%減少（36,486時間）しています。TA制度は広い意味の大学院教育の一環として導入された制度で、教育を学ぶための実地訓練（教育現場の体験）を行う制度ともみなされています。また、大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門についてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えるとはどういうことかを理解することもできます。今年度から博士後期課程の学生を対象に導入されたTF制度の前段階としての意義もあります。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する
- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的、意義、全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心構え、教育理論について理解する

- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA相互の交流をはかる



会場の様子



好評だったパネル討論

表1 平成27年度北海道大学全学教育TA研修プログラム

〈午前の部〉	〈午後の部〉
9:30 挨拶 舩 和順 全学教育部長	(A) 一般教育演習
9:35 講演「北海道大学の全学教育について」 鈴木 久男 総合教育部長	(B) ラーニングサポート
10:05 講演「TAのVision とMission」 瀬名波栄潤 (文学研究科)	(C) 講義
10:35 休憩 (10分)	(D) 論文指導
10:45 「TA業務に関する事務処理の内容」 土本 光一 (教育推進課)	(E) 情報学
11:00 パネル討論「TAの業務と役割」	(F) 英語Ⅱ オンライン授業
司 会：山田 邦雅 (高等教育推進機構)	(G) 英語Ⅱ 以外の英語の授業
教員パネリスト：土田 映子 (メディア・コミュニケーション研究院)	(H) 初習外国語 (中国語以外)
三品 具文 (理学研究院)	(I) 中国語
院生パネリスト：Benjamin EVANS (情報科学研究科)	(J) 文系基礎科目
中島 大貴 (理学院)	(K) 心理学実験
12:00 昼休み	(L) 理系基礎科目
12:00~12:30 コーヒーブレイク (院生パネリストとの談話)	(M) 自然科学実験
	(N) 体育学

午後の分科会は14分科会になりました。すべてを修了した参加者は181名でした。74名は午前か午後的一方にしか参加できませんでした。

なお、今回配布されたテキスト「北海道大学ティーチング・アシスタント マニュアル第4版」は、今年度新たに改訂されたものです。

修了後回収したアンケート総数は258で、修士183名博士61名でした（総和が総数とまらないのは記入がないため。以下同様）。このうち37名はすでにTAを経験しています。116名は職務の内容を知っていますが、128名はこの時点では知りませんでした。46名のTAが成績判定に参加するそうです。32名はこれ以外のTA研修を受けています。午後のセッション以外で、有益であったと記述が多かったのは、「TAのVision とMission」および「パネル討論」でした。（細川 敏幸）

### 各分科会の報告

#### A 一般教育演習

一般教育演習は、それぞれの授業で内容がばらばらであるため、分科会の目標を、TA同士で士気を高め合うこと、また、一般教育演習でよく利用されるグループ学習を実際に体験し、その手法とファシリテーションの方法を把握することとして行いました。参加者は30名で、4グループに分かれました。

まず初めに、一般教育演習の特徴と注意事項を説明し、グループ討議の意味と方法についてのレク

チャーを行いました。

次に、「TAが実際に遭遇するかもしれない事例」をテーマにグループ討議を行いました。参加者は初めて教員側の立場から授業について深く考え、TAの役割の重要性を実感している様子でした。

(山田 邦雅)

#### B ラーニングサポート

本分科会では、ラーニングサポート室が実施する個別対応型の学習サポートに従事する院生チューターの研修を行いました。学習サポートチューターは業務内容が通常のTAと異なり、(1)正課授業とは独立である、(2)学生とは個別対応の形で接する、という特徴を持っているため、科目に関する専門的知識のみならず、説明能力やコミュニケーション能力が重要になります。また学習サポートの利用者は年々増加しており、北海道大学の初年次教育において大きな役割を担うようになってきています。

研修にはチューター採用予定者の全員が参加し、昨年度からの継続採用者が4名、新採用者が7名というフレッシュなメンバー構成となりました。最初に、学習サポートの内容や意義、過去のデータや傾向等をスライドで説明し、チューター採用者に仕事内容を把握してもらいました。続いてそれぞれに自己紹介をしてもらい、自分の研究内容を非専門家に向けて説明することを課して、決められた時間で伝えたいことを効果的に伝えることを試みる場を設けました。本来は科目ごとの模擬対応などを行い

チューター経験者の経験を初採用者に共有する時間を取りたかったのですが、時間の都合でその部分は省略することになりました。

チューターの仕事は、正課外で学生と個別型・単独型の対応を行い、学生の主体性を重視しての対応が必要になるなど、いろいろと難しい点もあります。参加したチューターは、実際に勤務を行う上での心構えを養うことができました。

(清水 将英)

## C 講義

大講堂に集合しマニュアルを参考資料にして、細川のミニレクチャーによりTA制度の歴史と意味、シラバスの読み方、講義の基礎手法を学びました。次にN282に移動し、32名の参加者を4グループに分け、三上、飯田、亀野、細川が担当し、グループ学習によるケーススタディを行いました。まず、アイスブレイキングによりグループ内の自己紹介と役割分担を確認し、「古新聞の使い方」でグループの動きを会得しました。次に「講義中、明らかに私語が多く講義の進行を妨害している学生がいる。この講義の教員は、その生徒を注意しない。この場合、TAの田中君はどうすべきか。」など、4つの起こりうるケースのうちの一つについて、どう対応すべきかを議論しました。各グループとも熱心に課題に取り組み、最後の発表では状況を場合分けして対策を考えるなどしたわかりやすい解決策が提示され、有意義な研修となりました。

(細川 敏幸)

## D 論文指導

まず、『TA実践ガイドブック』（小笠原正明・西森敏之・瀬名波栄潤 編、玉川大学出版、2006年）を使用し、論文指導を概観しました。その際に、教員と学生の中継役として、TAの添削・評価への関わり方も確認しました。

次に、本学『平成26年度北海道大学全学教育の科目実施の手引（教職員用）』の「4. 試験・成績及び結果通知(3)試験」における「3. 不正行為」の中のレポートや論文などの剽窃盗用禁止並びに処分に関する文言を紹介。同時に、複数の大学のHPから入手した剽窃・盗用を禁じる公文書や防止のための論文指導文書も紹介し、適切な論文執筆・指導につ

いて議論しました。

学生や研究者の論文ねつ造・改ざん問題が取りざたされる昨今、論文指導は全学教育から大学院教育までの最重要倫理課題です。TAが未来の大学教員として教育と研究という両輪をとおして果たすべき役割を、本分科会では「論文」をキーワードに学びました。これは、本学大学院共通授業科目『PF (Preparing Future Faculty)』の内容を参考にしました。

(瀬名波 栄潤)

## E 情報学

情報学では、1年生約2600人を20人程度の小グループに分け、TA（もしくは非常勤講師）が、指導を行います。50名超のTAを有する科目であり、各TAが、担当学生に対して、課題の目的や手順など、明確な指示をする必要があります。

本分科会では、初めて情報学を担当するTA、TF、新たにSタイプのTAとして勤務するTA、その他、TA全体と非常勤講師を一同に会し、本年度の情報学Iの目標、内容、実施指導体制、教材、成績評価の概略の説明と具体的な評価項目の説明を行いました。

本年度は、情報学における新規項目として、TFの導入、現代日本学プログラム生への英語コースの開講、成績の11段階評価の導入があります。TA研修会では、成績の11段階評価についての詳細の説明の他、英語コースでの授業との連携、ならびに授業進行におけるTFの業務との連携の話も織り交ぜ、本年度の実施に向けての情報共有を行いました。

情報学では、140もの多数のグループが統一カリキュラムで授業を進行していきます。そのような統一カリキュラムを行うことによる優位性と、公平性を担保することの重要性などの担当者の心構えに触れました。

終了後には、TF全員ならびにTA（Sタイプ）が一同に会し、より良い授業進行についての情報共有と、授業時におけるサポートの在り方について、意見交換を行いました。

TAの指導力育成にもつながる本科目でのTA経験がより良いものになるように、TA全員に、主体的に授業に関わっていただく予定です。

なお本年度は、教育情報システムの更新がありましたが、導入の遅延により、3月に操作手順等を確認

認することができませんでした。通常は、新規TAには、3月に操作研修を行っていましたが、それが行えず、TA研修会で確認予定でしたが、研修会時に使い始めました際、不具合で停止してしまいましたため、予定しておりました確認ならびに説明を行うことができませんでした。この点、初めてのTAには特に不安が残るものとなりましたことが残念です。(布施 泉)

## F 英語Ⅱオンライン授業

英語Ⅱオンライン授業は、午後1時より4時過ぎまでTA研修を行いました。今年度英語Ⅱを担当するTA16名のうち、14名が参加しました。(残る2名に関しては、後日補講を実施。)

前半は情報教育館CALL教室にて、英語Ⅱの業務一般やTAとしての心構えについてのレクチャーと、授業で使用する教材サーバーの操作練習、後半は全学教務と準備室を経由しつつCALL110教室に場所を移して、先輩TAによるデモンストレーションと、授業中に起こりうる状況を想定しながら新人TA・先輩TAを交えてのディスカッションを行いました。先輩TAが具体例を交えながら新人TAにアドバイスする様子が見受けられ、新人TAが業務の理解を深めるのに役立つだけでなく、TA同士の交流の場としても効果的でした。例年の通り、今回も先輩TAに大いに活躍していただいた研修会でした。(長島 美織)

## G 英語Ⅱ以外の英語の授業

英語Ⅱ以外の英語の授業を担当するTAのための分科会は、午後1時半より国際広報メディア・観光学院会議室307にて集合の上行われました。英語Ⅱ以外の英語の授業については、業務内容が授業担当教員の方針により千差万別であるため、全体に関係すると思われる大まかな説明・案内を中心としました。外国語教育センター管轄の英語授業のTAの世話役は、この研修会をもって土田から園田勝英先生に交代することが決まっていたため、まずそのお知らせと新担当者の紹介を行いました。センター管轄外の授業担当の参加者が2名おり、担当授業や事務手続で不明点があるということだったので、マニュアルを参照しながら説明をしました。次に、マニュアルからごく重要な部分だけを取り出して口頭で注

意喚起を行いました。続いて、全学教育事務に全員を案内し、レポートボックス、帳簿や視聴覚機器の鍵の場所、機材の借り方などを確認してもらい、続いて全学教育スタッフ室にも案内しました。アンケートと名札の回収、個別の質問への対応をして、分科会を終了しました。

(土田 映子・園田 勝英)

## H 初習外国語(中国語以外)

最初にTAの担当外国語・授業科目の確認をしました。仏語のCALL必修授業担当者には、9月に開催される講習会への出席が不可欠である旨を伝えました。

次に外国語TAが一般に気をつけておかなければならない注意事項を説明しました。服装や立ち居振る舞いの注意点、教室内では常に学生に見られていることを意識し、不適切なふるまいをしないように注意しました。必修CALLのTAに対しては、教員のいない自学自習の監督における要領等を伝えました。担当教員との連絡を欠かさないこと、メールでの連絡の注意点を指摘しました。最後に担当教員と問題が生じた場合の連絡先について説明しました。

(西村 龍一)

## I 中国語

中国語TAは例年、ほぼ全員が中国語母語話者の留学生によって担われています。今年度TAの募集に対しては各研究院・研究科の留学生から多数の応募があり、書類審査や面接の結果、新規だけで38名を採用しました。

これら新規TA向けに開かれた午後の分科会では、午前の全体研修の要点を再度確認した後、中国語科目個別の業務や心構えを説明しました。上述の通り、ほとんど全員が母語話者である点を生かして、授業中、発音のお手本や学生との対話練習補助といった業務を行うほかに、授業内外で積極的に学習者の語学能力や動機づけ向上を支援し、さらには中国語圏の文化・社会への窓口としての役割を担うことが求められると強調しました。

(飯田 真紀)

## J 文系基礎科目

今年度のこの分科会には「文系基礎科目」以外の

科目のTA予定者も加わって、参加者数は昨年度よりもかなり多い11名でした。前半は、多人数講義におけるTAの役割について、C分科会のレクチャーを受けてもらい、後半では、現在の大学をとりまく環境、とくに教育の質保障について担当者の方から説明したあと、互いに具体的な問題点を挙げながら活発な議論を交わしました。居眠りしている学生にどう対処すべきか、単位の実質化といわれてもアルバイトとの兼ね合いをどうしたらよいか、TAに求められる役割は理解できるがもう少し待遇(時給)を改善できないか、あるいはTAマニュアルは主にアメリカの大学がモデルで、日本の大学にはたしてなじむのか、など、いずれも切実で鋭い問題提起がなされました。答えに窮しましたので、今後の課題として報告しておきます。

(山田 貞三)

#### K 心理学実験

心理学実験の分科会をN199心理学実験室で行いました。参加者は修士1年3名と博士1年の1名の計4名(女性3名、男性1名)で、そのうち中国人留学生の方が2名いましたが、2人とも日本語が堪能で学生とのコミュニケーションに支障をきたすことはなさそうでした。ただ全員、TAははじめてということでしたので、とくに実験実習のTAに必要とされる仕事について詳しく説明しました。具体的には、実験器具の準備、資料の配付、データ整理などについてです。また、学生への関わり、事故とその防止、個人情報の取り扱いなどについて、過去に起こった具体的事例を挙げながら説明しました。最後にそれらを参考にしながら、上記の事例への各自の対処法を考えて発表し、それについて全員で意見交換をしました。

(川端 康弘)

#### L 理系基礎科目

前半はミニレクチャー「グループ学習の基礎」(分科会C〈講義〉と合同)に参加して講義におけるTAの役割について受講してもらいました。後半は、ミニレクチャーとして「理系基礎科目のTAのあり方」と題した理系大人数講義の特徴、理系講義にお

ける技術(黒板、プロジェクタ、レーザーポインタなどの使い方)、総合教育における北大理系1年生のメンタリティについての特徴や注意事項に関して受講してもらいました。また、その後担当科目別に3グループに分かれ、学生としてTAと接した経験、教育実習における経験などを参考に、理系講義TAのあるべき姿についてグループ討論を行いました。この討論よりTAとの個人的な体験を共有することができ、これからのTA業務に役立てることができると思われます。後半の参加者は54名でした。

(松山 秀生)

#### M 自然科学実験

前半(13:30~14:15)は、N302教室において各カテゴリー(物理学、化学、生物学、地球惑星科学)共通のプログラムを行いました。具体的には、パワーポイント資料を用いて、自然科学実験の概要、自然科学実験TAとしての仕事および一般的な心構え、さらに一般的な安全上の注意点についての説明を行いました。また、後半(14:15~16:00)では、各カテゴリーに分かれ、カテゴリーごとの実験の詳細や安全教育、さらに実際のTA業務についての説明を行いました。

(三品 具文)

#### N 体育学

今年度のTA研修会・体育学分科会は4月2日(木)の13時より行われました。当初の予定は高等教育推進機構E205教室での講義および体育教官棟での説明の2本立てでしたが、3月27日(金)、全受講者を対象に体育教官棟施設の説明を行う機会があったため、当日はE205での講義のみとなりました。講義では体育学TAの概要と特色について、過去にTAを経験した学生からの声も交えつつ、説明を行いました。実技TAについては、特に安全管理・事故防止に関して多くの時間が割られました。体育活動中の事故では突然死がかなりの割合を占めることに驚いた様子も見られ、その後の講義にも熱が入った様子でした。今回の分科会が熱意あるTAの支え、事故の未然防止に繋がることを切に祈ります。

(阿部 匡樹)

## 総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革に係る 研究成果発表ワークショップ開催される

本学では、教育改革の取組みの一環として、総長室事業推進経費によるプロジェクト研究が公募されており、昨年度は、初の試みとして、研究成果を報告するためのワークショップを開催しました。同ワークショップが好評だったことを受け、今年度も開催することとなり、高等教育推進機構に新たに設置された高等教育研修センターが企画し、5月19日（火）及び21日（木）の2日間に渡って、高等教育推進機構S講義棟のS5教室において開催しました。様々な方面から北大の教育改革に取り組んできた各プロジェクトの研究成果を共有し、参加者との議論を通じて更なる発展の可能性を探り、全学的な教育改善を推進することが目的です。表1のとおり、2日間で10名が各プロジェクトの成果報告を行い、全15部局から66名の教職員が参加するワークショップとなりました。

両日とも、1研究当たり8分の発表と5分の質疑応答時間を取った後、高等教育推進機構の喜多村昇副機構長から「教育改革のために今求められるプロジェクト研究とは」と題した講演がありました。講演では、当該事業のこれまでの申請・採択状況につ

いての説明や、全国の教育改革の動向、北海道大学の今後の教育改革についての戦略等について話がありました。講演後は、参加者全員で全体討論を行い、学生の主体性を引き出すような授業の工夫、授業へのアクティブ・ラーニング導入により出ている課題、各プロジェクトの成果を全学の教育改革につなげる方法などについて議論が交わされました。

アンケート結果を見ると、両日とも参加者の満足度は高く、「短時間でわかりやすく」良かった、「参考になるものがあった」、「もう少し多くの教職員が参加できるよう、周知を広くしてもよいのではないか」、などといった意見をいただきました。高等教育研修センターでは、当日の参加者の意見やアンケート結果などを踏まえ、本学の教員に必要とされるFD研修会の企画などを検討しています。

(山本 堅一)



写真1 全体討論の様子

表1 ワークショップの発表者と研究題目（報告順）

5月19日（火）	
発表者	研究題目
文学研究科 眞嶋 俊造 准教授	研究者の専門職倫理としての研究倫理の教育コンテンツ開発と、ICTを活用した発信型オープン教材（日本語版・英語版）作成
メディア・コミュニケーション研究院 大野 公裕 教授	適応型の学習と試験ができるLMSの開発
メディア・コミュニケーション研究院 清水賢一郎 准教授	「中国語Ⅱ」CALL授業におけるICTとTFを活用したアクティブラーニングの試行的導入
先端生命科学研究院 出村 誠 教授	4学期・クォーター制による学部講義・実習プログラム開発研究(3)
高等教育推進機構 宮本 淳 特任准教授	「社会を生き抜く力の養成」につながるプログラムに関する研究－北海道大学におけるアクティブラーニング型授業の現状と課題についての教員アンケート
5月21日（木）	
脳科学研究教育センター 横澤 宏一 教授	脳機能イメージング全学教育研修プログラムの開発
工学研究院 小林 幸徳 教授	海外の交流大学との協働教育プログラムにおける授業運営の効果的な枠組み（フレーム）に関する実証研究
地球環境科学研究院 山崎 健一 准教授	「継続的なアクティブラーニングの機会提供」による国際的な研究・技術者の育成
法学研究科 會澤 恒 教授	日本法概論に係る英語リーディングス編成法についての研究
総合化学院 村越 敬 教授	次世代e-learningに向けた化学分野オープンコース教材のコンテンツ開発



## 第26回北海道大学教育ワークショップ開催される

本学では毎年、着任後5年以内の教員を対象とした宿泊型の新任教員研修を実施しています。今年度からは、高等教育推進機構に新しく設置された高等教育研修センターが企画し、6月19日（金）から20日（土）の2日間に渡って、北広島市にある北広島クラッセホテルを会場に開催しました。18部局29名の参加者が5つのグループに分かれ、各グループで一般教育演習の新たな授業を立案し、表1のプログラムに沿ってシラバスを作成し、本ワークショップのテーマである「学生主体型授業の設計」について学びました。

シラバスの作成には、「講義題目・目標の設定」「授業方略」「教育評価」の3つのセッションをそれぞれレクチャーとグループ討議、発表とフィードバックを1セットとして行いました。また、ワークショップではシラバス作成以外のセッションとして、これまでの教育活動をふり振り返り自らの教育観について改めて認識するとともに、他の参加者の教育観を知ることで多様性に触れるワークショップ、参加者の授業に関する悩みについてグループで解決策を考える

ワークショップ、そしてシラバスを校正する時間も取りました。シラバスの校正は、世話人として参加している高等教育推進機構の教員が添削を行い、参加者は添削に基づき再校正を行い、最後に世話人が確認して返却しました。

アンケート結果を、大学教員経験年数3年未満(15名)と3年以上(14名)に分けて見ると、個別プログラムの満足度については、シラバス作成の3つのセッションはいずれも経験年数3年以上の参加者の満足度が高く、統計的に有意な差となりました。また、「研修時間は適切だった」「研修の難易度は適切だった」「ワークショップは全体的に満足できた」という質問項目に対する回答者の平均値(5件法で5点満点)についても、経験年数3年未満より経験年数3年以上の参加者の平均値の方が高く、それぞれ2.87と4.00、3.53と4.36、3.53と4.43となり、統計的に有意な差が生じています。アンケート結果を踏まえ、参加者により深い学習をしていただけるようなワークショップにできるよう、引き続き検討していきます。(山本 堅一)

表1 第26回北海道大学教育ワークショッププログラム

2015年6月19日（金）	2015年6月20日（土）
8:30 受付開始（高等教育推進機構 情報教育館3F スタジオ型中講義室）	6:30～ 朝食
8:45 挨拶	8:30 各グループ修正
9:00 バス出発 【オリエンテーション（FDの意味、自己紹介）】	9:00 《個人提出課題》参加者のシラバス再提出
10:00 北広島クラッセホテル到着、玄関前で記念写真	9:00 レクチャー3「適切な成績評価」
10:05 ワークショップ「自分の教育観について考える」	9:30 グループ討議「教育評価」
11:05 レクチャー1「講義題目・目標の設定」	10:30 休憩
11:35 グループ討論「講義題目・目標の設定」	10:40 作成したシラバス「学生主体型授業」の発表
12:35 昼食	11:30 講評
13:30 中間発表「講義題目・目標の設定」	11:45 レクチャー4「教育倫理」
14:00 《個人提出課題》参加者のシラバス修正作業	11:55 《個人提出課題》参加者のシラバス返却
14:20 ワークショップ「授業に関するQ&A」	12:00 修了証書授与式
15:20 休憩（シラバス提出）	12:15 バス出発【参加者・世話人の感想】
15:30 レクチャー2「授業方略」	13:15 札幌駅到着
16:00 グループ討論「授業方略」	
17:30 中間発表「授業方略」	
18:20 夕食	
19:00 《個人提出課題》参加者のシラバス返却	
19:00 ラーニングサポート室の紹介	
19:20 懇親会（～23:00）	



写真1 グループ討議の様子



写真2 ポスターセッションの様子

## 教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

### 全学教育科目と1年生、3年生の自習時間 —平成26年度授業アンケートと2014年度学生調査の結果より—

本学では、授業における「単位の実質化」を評価するために、全学教育の「授業アンケート」と、1年生と3年生を対象とした「学生調査」により、自習時間を調べています。本ニュースレターでその分析結果を毎年報告しており、ここに平成26年度の結果を報告します。

授業アンケートでは、授業1回(90分)のために予習・復習に費やした時間を5択でたずねています。選択肢をそれぞれ「4時間以上(4)」、「3時間(3)」、「2時間(2)」、「1時間(1)」、「30分以下(0.25)」とし、括弧内の数値(単位:時間)に変換して平均自習時間を求めました。今年度の全学教育科目全体の平均自習時間は、授業1回あたり1.20時間でした。昨年度は1.16時間、一昨年度は1.12時間でしたので、微増していることがわかります。しかし、図1に示すように学期ごと9年分の自習時間の経年変化は、平成22年以降大きな変動を示しておらず、増加傾向はないように見えます。表1には「必修・選択必修科目」、「選択科目」別の自習時間、表2には各種科目区分ごとの平均自習時間を3年分示しました。必修・選択必修科目と選択科目の差は、昨年度に比べて小さくなっていることがわかります。科目に関わらず履修した授業には同等に取り組

んでいることを何うことができ、GPA制度の効果の表れと考えられます。科目区分ごとの平均値の経年変化に大きな特徴はありません。例年共通科目の学期差が大きい原因は、比較的課題が多い「情報学I」が1学期に開講されているためと考えられます。また、基礎科目は例年2学期の自習時間が長くなる傾向があります。わずかな時間差ではありますが、1学期の反省を踏まえ、その科目の重要性を認識し、授業への取り組み方が変わった科目と見ることができます。

学生調査は、文部科学省大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」により実施しており、1週間当たりの活動時間の中で「授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする」時間を8択(「全然ない(0)」、「1時間未満(0.5)」、「1~2時間(1.5)」、「3~5時間(4)」、「6~10時間(8)」、「11~15時間(13)」、「16~20時間(18)」、「20時間以上(20)」)で聞いています。それぞれの選択肢を括弧内の数字(単位:時間)に変換して平均自習時間を計算しています。今年度の調査結果は、1年生が7.5時間(昨年度は7.9時間)、3年生が7.6時間(7.2時間)でした。例年3年生の自習時間が若干短い傾向にありまし

た。今年度は逆転しています。回答者の特性（特に3年生の回答者は300名弱）も詳細に調べる必要がありますので、この差については議論しませんが、1年生、3年生ともに1日当たりの学習時間は、60分程度であることがわかります。

さらに、授業アンケートの全データの内、自習時間に4時間以上をかけているとの回答に絞って分析してみたいと思います。自習時間4時間以上の回答は1,520件ありました。その内、講義と演習の区分では、講義82%に対して演習が18%でした。文系は29%、理系は58%、残りは非常勤講師担当になります。各種科目区分では、基礎科目の割合が高く39%で、主題別科目が15%、共通科目が13%と続きます。必修科目と選択科目の区分では大きな差はなく、それぞれ53%、47%でした。「授業で要求される作業量は適切であった。」の問いには、73%が5段階評価で最高評価と回答しています。授業の難易度については、69%が「極めて難しい」あるいは「難しい」と回答し、28%が「適切」と回答しています。出席率は、85%が「100%出席」と回答しています。総合的な授業の満足度は、79%が最高評価と回答して

います。まとめると、授業の難易度は高いが、授業で要求される作業量は適切と感じているので、学生は自主的に4時間以上の自習時間を設けていると理解することができます。難易度が高いために、自習に時間をかけなければならないとの解釈ができるものの、授業の総合満足度も約8割が最高評価と回答しており、難易度に不満はないようです。この1,520件の回答は、全29,000件余りの回答の約5%になりますので、非常に意識の高い学生の回答であると言えそうです。一般的には、授業で要求される作業量に不満があるほど、そして難易度が高い授業ほど自習時間が長くなり、学生は不満を持ちつつも、仕方なく自習に時間をかけている傾向があると言えます。

(授業アンケートの詳細については、本学のURL: <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/enquete/enquete.htm> を、大学間連携共同教育推進事業については、<http://8gp.high.hokudai.ac.jp/> をご参照ください。)

(宮本 淳, 徳井 美智代)

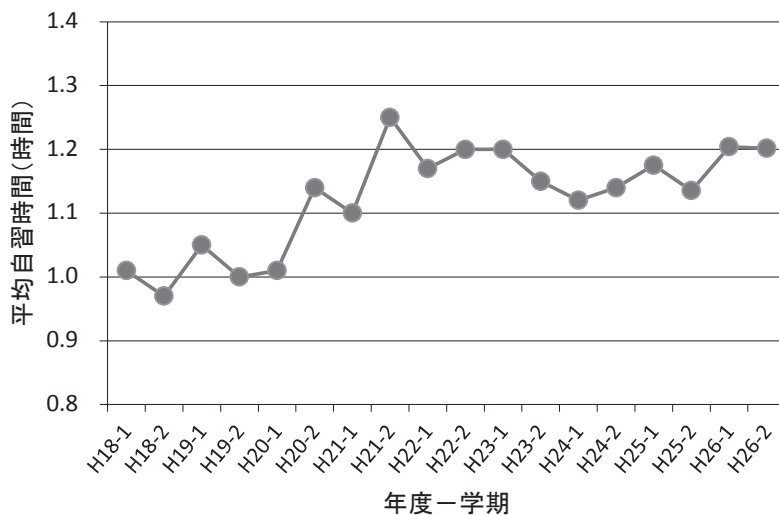


図1 全学教育科目における授業1回あたりの自習時間の経年変化

表1 必修・選択必修、選択科目別の自習時間(単位:時間)

	必修・選択必修	選 択
平成25年度1学期	1.30	1.06
平成25年度2学期	1.26	1.01
平成26年度1学期	1.28	1.13
平成26年度2学期	1.29	1.11

表2 科目区分ごとの平均自習時間(単位:時間)

網掛け部分はそれぞれの科目内で最も高い平均値

	主題別科目	総合科目	一般教育演習	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目・ 日本事情に 関する科目
平成24年度1学期	0.90	0.78	1.31	1.43	1.36	1.32	1.14	1.97
平成24年度2学期	0.93	0.81	1.24	1.25	1.27	1.32	1.20	1.86
平成25年度1学期	0.94	0.82	1.32	1.71	1.20	1.43	1.19	1.49
平成25年度2学期	1.00	0.81	1.25	1.01	1.34	1.30	1.23	-
平成26年度1学期	1.02	0.74	1.45	1.66	1.28	1.39	1.17	1.91
平成26年度2学期	1.02	0.90	1.40	1.22	1.36	1.29	1.27	1.68

## 北海道大学卒業生調査2014の実施概要

大学教育で身につけた能力と社会で求められる能力との関連を探り、これからの本学の教育のあり方、進むべき指標を得ることを目的として、2014年10月に北海道大学卒業生調査を行いました。本調査は昨年度に引き続き2回目の実施です。今年度の調査対象は、学部卒業後5年、10年、15年の卒業生とし、学生時代の教育や生活に関する意識、卒業後の大学とのつながり、卒業後の仕事の状況、大学教育への要望などを聞いています。参加は学部の任意となっており、本年度も昨年度と同様の7学部が実施しました(表1)。

調査票は2種類あり、ひとつは、文部科学省平成24年度採択「大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」に基づいた共通の調査票、もうひとつは、各学部独自の調査票です。その2種類の調査票を同封し、各学部および同窓会の協力のもと、学部ごとに、卒業生の住所にメール便で送付、返信用の封筒により郵送で回収する方法で行いました。各学部、同窓会、卒業生のみなさまのご協力を御礼申し上げます。

表1 学部別調査票回収状況

大学名	学部名	送付数	宛先不明	実質送付数	有効回収数	有効回収率
北海道大学	法学部	370	1	369	51	13.8%
	経済学部	188	8	180	24	13.3%
	医学部医学科	211	13	198	69	34.8%
	医学部保健学科	108	18	90	12	13.3%
	歯学部	126	5	121	32	26.4%
	農学部	186	7	179	70	39.1%
	獣医学部	100	19	81	20	24.7%
	水産学部	329	27	302	91	30.1%
	合計	1,618	98	1,520	369	24.3%

回答者の属性

卒業学部 (図1), 卒業年別の男女比 (図2) は

以下のとおりとなっています。

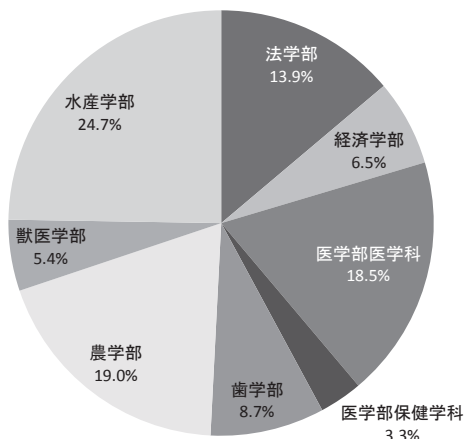


図1 卒業学部

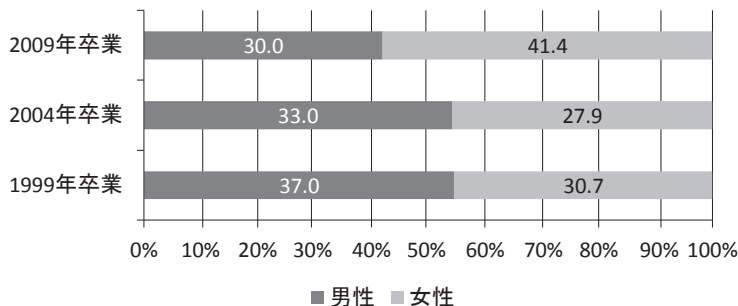


図2 卒業年別男女比

次号以降で、結果の一部をご紹介します。  
尚、本調査の各学部データと集計・分析結果につきましては、担当教員がそれぞれの学部へ持参し、ご説明いたします。本調査は2015年度も引き続き実

施いたします。新たに参加のご希望がある学部がございましたら、IR担当 (徳井・宮本) までお知らせください。

(徳井 美智代・宮本 淳)

## 地域社会連携 Community Relations

### 全学公開講座

### 「人と環境が抱える難問～その解決の最前線～」開催される

7月2日から23日にかけて、平成27年度の北海道大学公開講座 (全学企画) を計8回にわたって情報教育館 (20日は学术交流会館) で開催しました。この公開講座が本学で始めて40年目となる今年は、「人と環境が抱える難問～その解決の最前線～」をテーマに実施しました。

くらしに密着した話題から国境を越えてグローバルに広がる問題まで、現代社会の「難問」に、各分野の研究者はいかに挑んでいるのか、という切り口で、全8回の講座を構成しました。表の通り、安全保障や放射性廃棄物の処分、人獣共通感染症などタイムリーな話題が並び、受講者からは「どの回も今日の世相を反映したテーマで、大変ありがたかった」などと高い評価を頂きました。講義の様子は、NHKニュースや北海道新聞などでも報道されまし

た。

講義は例年どおり、期間中の月曜日と木曜日に実施しましたが、今年初めての試みとして、平日に仕事などがある方にも受講しやすいよう、8回中2回分を祝日 (7月20日 (月・海の日)) の午後に設定しました。この点も大半の参加者から好評でした。この日は、受講者限定のランチ (希望者対象) が中央食堂で提供され、受講者は講座前のひととき、牛トロ丼や北大農場産のソーセージなどの特別メニューを楽しんでいました。

今回、全8回を通して申し込んだ受講者は99人で、特定回のみ受講者20人を合わせると、受講者総数は119人でした。6回以上の講義に出席した83人には、最終回の閉講式で修了証書をお渡ししました。

(三上 直之)

		講 義 題 目	担 当 講 師
第 1 回	7 月 2 日	がんに対する動体追跡陽子線治療	医学研究科 白土 博樹 教授
第 2 回	7 月 6 日	相互扶助の社会環境 - 先人有島武郎の道 -	文学研究科 中村 三春 教授
第 3 回	7 月 9 日	日本における作物栽培の現状と将来展望	農学研究院 岩間 和人 特任教授
第 4 回	7 月 13 日	どうする?! 核のごみと鉱山廃水	工学研究院 佐藤 努 教授
第 5 回	7 月 16 日	インターネットは福音か、災いの源か	法学研究科 町村 泰貴 教授
第 6 回	7 月 20 日	平和は可能か - 日本の安全保障を考える -	公共政策学連携研究部 遠藤 乾 教授
第 7 回		エボラウイルス研究の最前線	人獣共通感染症リサーチセンター 高田 礼人 教授
第 8 回	7 月 23 日	若者にみる難問・若者が挑む難問 - 地域青年活動の歴史と現在 -	教育学研究院 辻 智子 准教授



写真 1 講義の様子



写真 2 講師に質問する受講者

## 学生支援 STUDENT SUPPORT

### 平成27年度夏季休暇における 「全学インターンシップ」の実施に向けて

キャリアセンターと共同で、全学インターンシップを開講していますが、今年度についても夏季休暇を中心に向け、学生と企業の希望のマッチング、事前研修などを行っています。

まず、5～6月にかけて、参加希望学生と企業等

のマッチングを行い、7月末現在のべ197名の参加が決定しています(表1)。

参加が決まった学生に対しては7月3日、7日、10日、14日に講義形式の事前研修を実施し(写真)、その後、1名あたり10分の個人面談も実施しまし

た。この事前研修や個人面談では、インターンシップ先の企業・団体や業界等の研究を行うとともに、インターンシップを通じて検証したい仮説をインターンシップ前に設定し、インターンシップを通じてその検証を行う予定です。

同時に、学生はインターンシップ先の企業等に対して連絡を取り、札幌近辺の場合は事前に訪問し、打ち合わせを行っています。仮説の検証や学生自らの連絡・打ち合わせの実施は、1～2週間という短期間のインターンシップの効果をより高めるため、北大独自の方式となっています。

これらを経て、参加学生はそれぞれの企業・団体

で夏季休暇中にインターンシップ実習を行う予定です。  
(亀野 淳)



事前研修の様子

表1 全学インターンシップ参加者数

① 学部

学年 学部	1年	2年	3年	4年 以上	計
文学部	0	1 (1)	20 (1)	0	21 (2)
教育学部	0	0	12 (1)	0	12 (1)
法学部	0	2 (1)	30 (3)	0	32 (4)
経済学部	1	3 (1)	30 (1)	0	34 (2)
理学部	0	0	10 (2)	1	11 (2)
医学部	2 (1)	0	0	0	2 (1)
薬学部	0	1	1	0	2
工学部	1	2 (1)	30 (2)	2	35 (3)
農学部	0	1 (1)	15 (4)	1	17 (5)
水産学部	1	1	2	0	4
総合理系	1 (1)	0	0	0	1 (1)
計	6 (2)	11 (5)	150(14)	4	171(21)

( ) 内は新渡戸カレッジの学生で内数

② 大学院

課程・学年 研究科・学院	修士1年	修士2年	計
教育学院	2	0	2
経済学研究科	4	0	4
理学院	2	0	2
農学院	6	0	6
水産科学院	1	0	1
環境科学院	5	0	5
生命科学院	6	0	6
計	26	0	26

## 特別講義「キャリアデザイン」開講

全学教育の特別講義「キャリアデザイン」を開講しています。

本講義は、平成6年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。入学後のできるだけ早期に自らのキャリアを考えるきっかけを与え、自らの目標に向かって前向きに勉学することを促すことを目的に、社会の第一線で活躍している方々の学生生活から現在に至るまでの体験

談、キャリア形成についての講義、グループワークなどのアクティブ・ラーニングを通じて、大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」の意義や関連性を考え、今後の自らのキャリアを考えるきっかけとすることができるよう内容となっています。

今年度は、1年生を中心に54人が受講しており、表1のとおり、担当教員の講義のほか、小柴キャリアセンター長の講義、さらには、外部講師として、

田瀬和夫氏（デロイトトーマツコンサルティング 執行役員・ディレクター）、小野里有紀氏（株式会社リクルートキャリア 新卒事業本部 営業統括部 地域活性営業部 北海道グループ リクルーティングアドバイザー）、山地章夫氏（ヤマチユナイテッドグループ 代表）の3人をお招きし、お話をいただきました。

また、グループワークでは、「〇〇として活躍するために必要なこと」（〇〇には各グループで選択した職業が入ります）というテーマで職業人へのインタビューなどを実施し、プレゼンテーションを行いました。

さらに、昨年度より自己分析の一環としてPROG（Progress Report on Generic Skills）を実施し、学生のコンピテンシーとリテラシーを定量的に測定しました。この測定結果を学生自身に返却し、今後

の学生生活の目標設定の参考にしてもらうとともに、学生生活との関連性について多面的に分析を行う予定です。

（亀野 淳）



グループワークの発表の様子

表1 2015（平成27）年度 キャリアデザイン スケジュール

① 4月16日（木）	○ 本科目の内容、目的など
② 4月23日（木）	○ キャリア概論Ⅰ（亀野講義）
③ 4月30日（木）	○ 自己分析（PROG）の実施
④ 5月7日（木）	○ キャリア概論Ⅱ（亀野講義）
⑤ 5月14日（木）	○ キャリア概論Ⅲ（小柴キャリアセンター長講義）
⑥ 5月21日（木）	○ 今後の進め方について ○ 外部講師による講義やグループワークについて ○ グループワークⅠ：グループの編成分け、討論開始
⑦ 5月28日（木）	○ 自己分析（PROG）の返却、解説
⑧ 6月11日（木）	○ 外部講師Ⅰ：田瀬 和夫 氏 （デロイトトーマツコンサルティング 執行役員・ディレクター） 「グローバル時代のキャリア構築」
⑨ 6月18日（木）	○ グループワークⅡ：調査及び討論
⑩ 6月25日（木）	○ 外部講師Ⅱ：小野里有紀 氏 （株式会社リクルートキャリア 新卒事業本部 営業統括部 地域活性営業部 北海道グループ リクルーティングアドバイザー） 「働くよろこび。」
⑪ 7月2日（木）	○ グループワークⅢ：調査及び討論
⑫ 7月9日（木）	○ 外部講師Ⅲ：山地 章夫 氏 （ヤマチユナイテッドグループ 代表） 「「多角化」で仕事と人生を楽しむ」
⑬ 7月16日（木）	○ グループワークⅣ：調査及び討論
⑭ 7月23日（木）	○ グループ発表Ⅰ
⑮ 7月30日（木）	○ グループ発表Ⅱ ○ 全体のまとめ



# 科学技術コミュニケーション オープンエデュケーションセンター CoSTEP部門

## 2015サイエンスパーク実践報告

### 「ごはんはカラダを通過してどこへいく？—アニメで体験しよう」

2015年8月5日、毎年開催されている「子どものための科学の祭典 サイエンスパーク」(主催：北海道・地方独立行政法人北海道立総合研究機構)に、CoSTEPの教育実践として「ごはんはカラダを通過してどこへいく？—アニメで体験しよう」を出展しました。本プログラムは午前と午後の2部構成で、午前の部では消化に関する説明と絵づくりを、午後の部ではアニメーションの上映会を行いました。CoSTEP受講生がスタッフとして小学生19人とともに過ごした1日についてご紹介します。

いきました。豊かな想像力から生まれた絵のおかげで、まわりのおともも消化酵素に関するイメージが広がったようでした。

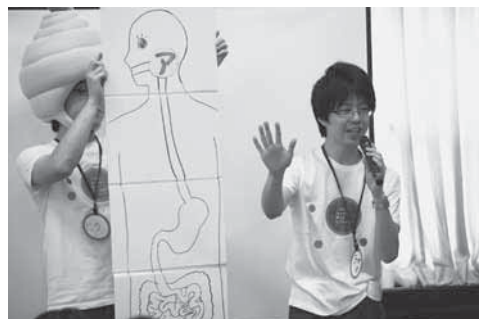


写真1, 2 消化の説明のようす。アミラーゼ, リパーゼ, ペプシンを擬人化して伝えました。

#### 午前の部：

#### 消化に関する絵づくり

札幌駅前通地下広場(チ・カ・ホ)で10時から11時まで行われた午前の部では、スタッフが消化に関する説明を行った後、子どもたちが絵を描く企画としました。消化の複雑な過程を説明するため、3つの消化酵素(アミラーゼ, リパーゼ, ペプシン)を選び、キャラクター化して伝える試みを取りました。



写真3, 4 描いた絵で自己紹介をする子どもの話しやスタッフの説明を、注意深く聴いています。

消化酵素の名前や役割を絵に表すことは、大人にとってはなかなか大変なことでしょう。しかし子どもたちは自由に想像力を働かせ、絵を描いて



写真5, 6 消化酵素のキャラクターづくり

### カラダで体験する消化管体験ツアー

イベント会場には、子どもたちが身体を使って体験できる消化器官の模型を「消化管体験ツアー」からお借りして設置しました。ボールで遊べる胃の世界や、チューブ状の模型に潜って遊べる腸の世界などで、子どもたちは自然に和み、楽しんでいました。



写真7, 8 胃や腸の模型で遊ぶ子どもたち

アニメーションの説明に入る前に、消化管体験模型を用いて、子どもたちが次々と消化器官に入って出てくるようなこまどりアニメーションを制作しました。自由に遊びまわる子どもたちとこまどり映像をつくることは大変でしたが、このこまどり映像づくりを通して映像のフレームに関するイメージづくりができました。

### アニメーションのしくみ

この時点で、子どもたちは自分が描いた絵がどうなるのか知りません。次に、東京にいる映像クリエイターのオフィスと会場をインターネットでつなぎ、チャットをしました。映像は機械によってなんとなくつくられるのではなく、作り手がいることを意識するのは、大事なことからです。見知らぬクリエイターが突然、画面から登場し、子どもたちの絵を使ってアニメーションを作ると伝えたことで、

子どもたちは喜び、午後の上映会に完成したアニメーションを見にくる約束を残して、午前の部は終わりました。

### 午後の部：アニメーションの上映会

午後の部は、会場のステージコーナーで、午後2時45分から45分間行われました。午前の部に参加していない子どももたくさんいたので、まずは午前の部に行った消化酵素の説明などをおさらいし、消化に対する全般的なイメージを持ってもらえるようにしました。



写真9, 10 午前の部で行った説明とこまどり映像上映, 子どもたちと意見交換

いよいよ、アニメーションの上映です。子どもたちが描いたイラストが、イキイキとした動きを与えられ、一本のアニメーションとして流れてきました。子どもたちは、初め漠然と見ていましたが、やがて自分の描いたものを探したり、他の子どもが描いたものの形や動きを見て楽しんだりし始めました。上映が終わると、アニメーションを制作した東京のクリエイターとチャットでつなぎ、子どもたちとの間でアニメーションについての感想などを話しました。(※当日完成したアニメーションは、こちらのリンクからご参照ください。http://youtu.be/xjDOrv8FLP8)



写真11, 12 映像に触れている子どもたちと、うれしそうな表情



写真13, 14 顔の見えるクリエイターの存在を確認し、はがきを配布

映像制作ワークショップによる新たな科学技術コミュニケーションの可能性

最後に、子どもたちの描いたイラストをはがきに

したものと、消化の流れを説明したパンフレットを配り、イベントを終了しました。

今回、映像を遠隔かつライブで制作して上映することを試みました。双方向コミュニケーションができた点、映像制作ワークショップの道が開かれた点など、科学技術コミュニケーションの新しい切り口が提示できたと評価しています。また、自分の身体の中の働きについて、子どもたちが想像力を働かせることで、消化酵素の名前や性格を覚えられたことも、遊びから学びにつながったものとして評価できるポイントでしょう。

午前と午後で時間や会場が分かれたために参加者の利用が途切れたことや、回線や映像トラブルがあったことなどは、課題として残っています。しかし、参加者を対象に行ったアンケートでは、絵を描き、消化模型で遊び、映像を触り楽しむなど、身を使う体験という点がよかったとの意見が多く見られ、全体的評価も平均3.4点（4点満点）で、比較的満足という結果がえられました。

本プログラムのようにサイエンスをさまざまな方法で学び、遊べる場が増えることを望む意見が多く寄せられたことから、今後さらに多様なCoSTEP実践企画を開催したいと思います。

写真15 イベント終了後の団体写真

積極的に参加したCoSTEPの受講生やスタッフ、サイエンスパーク関係者のみなさん、消化管模型ツアーのみなさんにこの場を借りて感謝を申し上げます。新しい挑戦を続けるCoSTEPの実践に、今後も楽しみにご注目ください。

(朴 炫貞)

## 新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

### 着任のご挨拶

高等教育推進機構 高等教育研修センター 特任准教授 山本 堅一

本年4月、高等教育推進機構に新たに設置された高等教育研修センターに着任した山本堅一と申します。専門分野は「高等教育開発」、現在の研究テーマは「研究を促進する高等教育開発論の確立」になります。

私はこれまで、高等教育の質保証という観点から、授業に関する教員支援（授業の組立て方や教授法に関する研修、個別コンサルテーション等）、カリキュラムやポリシーに関する学部・学科支援（カリキュラム見直しの研修等）、教員表彰制度など大学全体の制度に関する支援を行い、研究をしてきました。

多くの大学でFDは活発化していますが、教員の負担はますます増えているように思います。私は、大学教員が教育に力を入れるのは当然であり、だからこそ教育評価制度もしっかり構築すべきだと考えていますが、最も心血を注ぐべきなのは研究であると思っています。そこで私は、「教員の研究活動を促進することができるFD活動を行う」というポリシーを持って仕事をしています。

たとえば、効率的な授業準備・授業運営、他教員・TAとの連携による授業負担軽減、教育表彰制度やサバティカル制度など、研究時間を確保するための支援を整備することで、間接的に教員の研究を促進することができるFD活動が必要であると考えています。FDといえば教育改善、そのためにいろいろな研修、講習に出なければならず、どんどん時間が減っていく、と思われる方も多いのですが、私にとって教育改善はあくまでも手段です。

高等教育研修センターは、FD部門、SD部門、ラーニングサポート部門で構成されていますが、私は主にFD部門を担当しています。そして、これまで高等教育推進機構の研究部門が担ってきた各種FDプログラムを継承するとともに、新たな事業を展開しています。授業など教育面での支援については、是非とも専門家である私たちを頼りにしていただきたいと思います。皆さんに役立つ様々なプログラムを提供していきますので、お気軽にご利用・ご参加くださいますよう、よろしく申し上げます。

### 着任のご挨拶

高等教育推進機構 高等教育研究部 高等教育研究部門 特任助教 成瀬 延康

2015年3月1日付で、高等教育推進機構高等教育研究部門に特任助教として着任いたしました、成瀬延康と申します。私は、透過電子顕微鏡を用いた物質表面の原子配列に関する研究により早稲田大学で学位を取得したのち、東京大学でナノ材料の電子状態と光の相互作用に関する研究を行いました。その後、大阪大学産業科学研究所にて、フェムト秒時間分解電子顕微鏡の開発、および、それを用いた光誘

起構造相転移動力学の研究に、助教として従事しました。

私は、物性物理・材料の実験研究に15年以上携わってきたわけですが、当初から、将来は人を育てることを通し、かつ、自分も高めてゆける場にこそ自分を捧げたいと強く感じており、大学教育に資する方面の仕事に携わりたいと考えてきました。人とという財産の価値を高めながら同時に知の追求ができ

る場は大学以外にないと感じていたからです。

着任した高等教育研究部門では、科学技術振興機構のグローバルサイエンスキャンパス事業（北海道大学スーパーサイエンティストプログラム (SSP)）に携わります。SSPは、高校生を対象として、既存の学問の枠を超えた複合的視点を持ち、世界的な研究課題に果敢に取り組む熱い志を持った「超科学者」を養成するためのプログラムです。SSPの研究活動では、北大の膨大な研究資産を活かしながらICTを駆使するため、遠隔地からも先端研究に取り組むことができる点が大きな特徴です。時間的距離の大き

な北海道のデメリットを逆手にとる挑戦的なプログラムであり、私自身もSSPに関われることに喜びと静かな情熱を燃やしているところです。

SSPで扱う研究テーマは、地球規模で複雑な分野横断型ですが、私自身が携わってきた物性研究の経験が大いに生きると感じております。若い学生が学問・研究に対して知的好奇心や意欲をもてるように、一緒になって不思議がり、楽しみ、研究をやり遂げる覚悟でおります。教育分野において新参者ではありますが、みなさまのご指導をよろしくお願いいたします。

## 日誌 EVENTS, April-July

### 4月

- 1日 (会議) 第1回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 2日 (行事) 平成27年度全学TA研修会
- 2日 (行事) 全学TA研修会
- 5日 (行事) 新渡戸カレッジ仮入校プレイスメントテスト
- 7日 (行事) 新入生オリエンテーション, 総合教育部ガイダンス
- 8日 (行事) 入学式
- 10日 全学教育部 第1学期授業開始日
- 15日 (行事) 新渡戸カレッジ仮入校合格発表
- 16日 (会議) 平成26年度第3回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)
- 22日 (会議) 第4回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)
- 25日~26日 (行事) 新渡戸カレッジ第1回対話プログラム
- 27日 (会議) 第1回学生委員会
- 30日 (会議) 第1回教育改革室会議
- 30日 (会議) 新渡戸スクール運営会議

### 5月

- 8日 (会議) 第1回新渡戸カレッジフェロー交流・研究会
- 8日 (会議) 第1回新渡戸カレッジ運営会議
- 9日 (行事) 新渡戸カレッジ入校式
- 9日 (行事) 新渡戸スクール開校式
- 9日~10日 (行事) 新渡戸カレッジ学内合宿
- 15日 (会議) 入学者選抜委員会
- 18日 (会議) 第5回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)
- 19日 (会議) 第1回全学教育専門委員会
- 19日・21日 (行事) 平成27年度総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革に係る

### 研究成果発表ワークショップ

- 20日 (行事) 第1回新渡戸学セミナー
- 25日 (会議) 第2回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 27日 (会議) 第2回教育改革室会議
- 27日 (行事) 第2回新渡戸学セミナー
- 28日~29日 (会議) 平成27年度国立大学教養教育実施組織会議 (岩手)

### 6月

- 1日 (会議) 第79回教務委員会
- 1日 (会議) 第6回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)
- 10日 (行事) 第1回新渡戸カレッジフェロー講演会
- 12日~16日 (会議) 第3回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 18日 (会議) 第1回大学間連携共同教育推進事業卒業生調査打合せ (TV)
- 19日~20日 (研修) 第26回北海道大学教育ワークショップ (北広島)
- 22日 平成28年度AO入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 22日 (会議) 第1回新渡戸カレッジ運営会議教務専門委員会
- 22日 (会議) 第3回大学IRコンソーシアム定時総会 (同志社大学・TV)
- 23日 (会議) 第1回オープンエデュケーション専門委員会
- 23日 (会議) 第2回全学教育専門委員会
- 24日 (行事) 第3回新渡戸学セミナー
- 25日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (理系基礎科目)
- 26日 (行事) 新渡戸カレッジ特別講演会
- 30日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (外国語科目)

## 7月

- |                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| 1日・3日・4日・6日・9日 (行事) | 13日 (行事)          |
| 新渡戸カレッジ第2回グループ・     | 第2回新渡戸カレッジフェロー講演  |
| ミーティング              | 会                 |
| 2日～23日 (行事)         | 14日 (会議)          |
| 北海道大学公開講座 (計8回)     | 第1回総合教育移行専門委員会    |
| 4日 (会議)             | 15日 (会議)          |
| 新渡戸カレッジフェロー懇談会      | 平成27年度第1回大学IRコンソー |
| 4日・5日 (行事)          | シアム運営委員会 (TV)     |
| 新渡戸カレッジ第2回対話プログラ    | 17日               |
| ム                   | 平成28年度入学者選抜要項公表   |
| 7日～9日 (会議)          | 18日 (説明会)         |
| 全学教育専門委員会成績評価結果検    | 全国国公立・有名私大相談会2015 |
| 討専門部会 (持回り)         | (大阪)              |
| 9日～13日 (会議)         | 20日 (説明会)         |
| 第3回全学教育専門委員会        | 全国国公立・有名私大相談会2015 |
| (持回り)               | (東京)              |
| 10日 (会議)            | 21日 (会議)          |
| 全学教育科目責任者会議         | 第4回全学教育専門委員会      |
| (文系基礎)              | 22日 (会議)          |
| 12日 (説明会)           | 総合入試・総合教育検証に係るWG  |
| 全国国公立・有名私大相談会2015   | タスクフォース           |
| (名古屋)               | 22日 (会議)          |
|                     | 第2回学生委員会          |
|                     | 24日 (説明会)         |
|                     | 北海道大学入試説明会        |
|                     | (高校教諭対象)          |
|                     | 26日 (説明会)         |
|                     | 全国国公立・有名私大相談会2015 |
|                     | (横浜)              |
|                     | 27日 (会議)          |
|                     | 第1回教務情報システム専門委員会  |
|                     | 28日 (会議)          |
|                     | 第1回高等教育推進機構学務委員会  |
|                     | 29日 (会議)          |
|                     | 第3回教育改革室会議        |

## 行事予定 SCHEDULE, September-December

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| ◆9月                 | 15 (木)               |
| 24 (木) 午後           | 月曜日の授業を行う日           |
| 学部・学科等移行ガイダンス       | (木曜日の授業は行わない)        |
| 25 (金) 学部・学科等紹介     | ◆11月                 |
| 28 (月) 第2学期授業開始日    | 15 (日) AO入試・帰国子女入試   |
| 28 (月)～10月2日 (金)    | ◆12月                 |
| 学部・学科等移行手続き(予備志望調査) | 2 (水)～8 (火)          |
| 抽選科目の申込期間 (Web入力)   | 履修登録した科目の取消し受付 (Web) |
| ◆10月                | 自由設計科目登録変更期間         |
| 6 (火) 予備志望調査結果発表日   | 28 (月)～1月4日 (月)      |
| 抽選科目の結果発表日及び追加申込日   | 冬季休業日                |
| 7 (水)～14 (水)        |                      |
| 履修届Web入力            |                      |

ニュースレター 2015, No.103 目次

(巻頭言) オープンエデュケーションセンター 小林 幸徳 ..... 1	全学公開講座「人と環境が抱える難問 ～その解決の最前線～」開催される ..... 13
TA研修会開催される —181名が修了— ..... 3	平成27年度夏季休暇における「全学インターンシップ」 の実施に向けて ..... 14
総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革 に係る研究成果発表ワークショップ開催される ..... 8	特別講義「キャリアデザイン」開講 ..... 15
第26回北海道大学教育ワークショップ開催される ..... 9	2015サイエンスパーク実践報告 「ごはんはカラダを通過してどこへいく?—アニメで 体験しよう」 ..... 17
全学教育科目と1年生, 3年生の自習時間 —平成26年度授業アンケートと2014年度学生調査の 結果より— ..... 10	新任紹介 ..... 20
北海道大学卒業生調査2014の実施概要 ..... 12	日誌 ..... 22
	行事予定 ..... 23
	目次・編集後記 ..... 24

編集後記

高大連携授業聴講型公開講座の準備で慌ただしい時期になりました。今年度は例年よりも多くの高校生が参加を希望しています(過去2番目の規模)。これまでの取り組みの成果として、多くの方に関心をもってもらえることは大変喜ばしいことです。その一方で、さまざまな参加者(参加校)のニーズに応えるため、事務作業が煩雑になります。このような課題に少ない人的・財政的リソースで対応できるように、文書作成や連絡調整のプロセスの効率化に取り組んでいるところです。本事業の取り組みの詳細については、また追って記事の中でご報告させていただきます。

(NIIDA)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)  
通算 第103号

発行日： 2015年9月30日  
発行元： 北海道大学高等教育推進機構  
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目  
編集委員：◎細川敏幸・木村純・鈴木誠・飯田直弘  
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで  
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521  
インターネットホームページ：  
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>